とある錬鉄の英霊が為す物語

哀鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある錬鉄の英霊が為す物語

【Ｎコード】
Ｎ７２３５Ｚ

【作者名】
哀鈴

【あらすじ】
英霊エミヤは、科学の街、学園都市へと至る。
発達した科学、それによって生じる超能力。そして、元の世界とはちがう在り方をした魔術師たち。
自身の理想の果てに摩擦しきった彼は、この世界で何を為すのか。
科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

というわけで、エミヤｉｎ禁書の世界です。
多作品に比べ、エミヤと禁書のクロスが少ないと思ったので、書いてみました。
初投稿ですので、設定が甘かったり、文章が拙い部分が多々あると思いますが、よろしくお願いします。

剣の丘にて（前書き）

よろしくお願いします。

剣の丘にて

『…呼ばれている。』

無限の剣が乱立する荒れ果てた荒野で、男は自身が今まさに喚び出されようとしていることを悟った。

『しかしこれは…？』

この召喚は、守護者として喚ばれる時とも、聖杯戦争でサーヴァントとして喚ばれる時とも異なる。

いや

そもそも喚ばれるというよりは、道が開く、といった感覚に近い。

『しかし、どうであれ、私がこれに抗うことができないのということに、変わりはない』

男は口端を皮肉気に歪める。

『ならば、せめて、向こうでは精一杯足掻くこととしよう』

そして、光がはじけた。

男は消え、残ったのは荒れ果てた世界だけ。

ただ、世界を覆う朱い歯車が、廻り続けていた。

無限の剣は黙したまま、担い手を待ち続ける。

第1話

学園都市

東京西部に位置し、総面積は、東京都の約3分の1に相当する巨大都市。

都市の周囲は壁に囲まれ、専用ゲートと空路を除き、出入りする方法がなく、外界から隔離されている。

さらに、その高い化学技術と生活水準は、学園都市の内と外では、数十年以上の技術の差が存在しているとまでいわれるほどである。

総人口は２３０万人ほどであり、その８割は学生、それぞれが能力開発をうけている。

能力開発とは、脳を開発して、超能力を発現させることを目的としたものだ。

事実この都市の中では、能力者という存在が、あたりまえに存在してる。

そんな都市内の、とある学区に建つ、窓も、入口さえも存在しないビルの中。

液体に満たされた巨大なビーカーの中に、一人の『人間』が浮かんでいた。

男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える『人間』。

学園都市統括理事長、アレイスター・クロウリー。

最先端の科学技術を持った都市の街の長の視線の先には、一人の男がいた。

年齢は、高校生くらいだろうか。鍛えているのであろう、服の上からでも、全身に程よく筋肉がついていることが窺える。

特徴的なのはその短髪。銅が錆びたような赤い色をしている。

そして、なによりも目につくのは、その瞳であろう。男の年齢には

ふさわしくない、まるで鷹のように鋭い目。
その瞳が、彼が只者でないことを表している。
そして、男が口を開いた。

「さて、アレイスター。これは、どういうことだ？」

「どういうこと、とは？」

「とぼけるな」

男が、アレイスターを射殺さんばかりに睨みつける。
しかし、その目に睨みつけられているのにもかかわらず、その表情はまったく変わらない。

「これのことだ」

男は眉間に皺を浮かべながら、自分の手の中にある赤いコートを指さす。

「なぜ私の聖骸布の外套が、こんなコートになっているんだ…」

男はもともと、ある聖人の聖骸布でつくられた赤い外套を、身にまとっていた。
しかし、それは今現在、現代風のロングコートと化している。

「とはいっても、君のあの外套は、装着が面倒だろう？
だから、少しばかり手を加えてみた。」

「手を加えてみたって…」

男は痛むこめかみを抑える。

たしかに、もともと男が着ていた外套は、上半身と下半身で別れており、少しばかり着るのが面倒であった。
とはいっても、長年身に着けている、何度も自分の命を守ってくれたものである。
勝手に手を加えられて、いい気はしない。

「安心したまえ、学園都市製繊維を使い、性能を変えることなく、さらに防御力をあげることに成功している。」

「…そうか」

「そしてさらには」

「もういい」

これ以上聞くのも面倒だし、そもそも今は夏。そう着る機会もないだろう。
そう思い、男はため息をついた。

そして液体の中に、目を向ける。

「では、私はそろそろ行くとしよう。」

「ああ、行くといい。この街が、君に合うことを願っているよ。」

しばしの沈黙、そして。

「…アレイスター。」

「なんだ？」

男の視線が、より一層鋭くなった。

「貴様が何を企んでいるのかはしらないが…、すべてがうまくいくと思うな。」

「…というと？」

「貴様のいう『計画』に、おそらく私も組み込まれているのだろう。だが、そう簡単に私を利用できるとは、思わないことだな。」

「…心得ておくとしよう。」

ビーカーの中の『人間』は、無表情のままそう答えた。

「では、さらばだ――――『魔術師』アレイスター・クロウリー。」

「ああ、君に幸運を――――衛宮士郎、いや、『英霊』エミヤ。」

こうして、錬鉄の英雄は、学園都市へと至った。

科学と魔術が交差するとき、物語は始まる。

第2話

英霊エミヤが、学園都市に降り立ったのは、数日前のことである。

彼が最初に目にしたのは、数多くの機械だった。
見たこともない技術の使われているさまざまな機械。
そう、『機械』である。
これを見たエミヤは、まずこの事実を訝しんだ。

『機械』とは、一般的に考えて、『科学』と結びつくものである。
しかし、呼び出された自身は、魔術的な存在。
英霊であり、抑止の守護者。

よって、自身を呼び出すためには、魔術的な儀式が必要である。

しかし、この場にはそのようなものはなく、周りに見えるのは、
科学のモノのみ。
果たして自分は、どのような理由でここにいるのか、エミヤがそのような疑問を持つことは当然のことである。

ｓｉｄｅ　ＥＭＩＹＡ

私は、ショックをうけていた。

再び、あたりを見回す。
空中に浮かんだモニター、次から次へと無数の数字を処理し続ける小さな箱のような機械、ランプが点滅を繰りかえす大量のコードにつながれた強大なコンピューター。

少し見るだけでも、ここが、かなり科学技術の発達した場であることがうかがえる。

「（場違いだな…）」

なんてことを呆然としつつ考える。

しかし、なにも自分は、まわりが機械ばかりだからとか、魔術の気配を感じないからといった理由で、ここまでショックをうけているわけではない。

問題は、自分の容姿にあった。

電源のはいっていない暗いモニターに映った、自分の姿をみる。

服装は、普段と同じ。黒のアーマーに、赤い聖骸布の外套を羽織っている。

ここまでは問題ない。

しかし…

「衛宮士郎…だと…」

そう、今の自分の姿は、自分が過去、衛宮士郎であった時の姿なのである。

自分の本来の姿は、白い髪に褐色の肌、身体は２０代後半くらいのものであった。

だが、今現在は、銅が錆びたような色の赤い髪に、日本人らしい肌の色。そしてなにより、高校生くらいの身体だ。

「…なんでさ…」

さらに続けて自分の身体の中身（構造）を、視る（解析する）。

「…」

――自身の能力は、英霊時と変わりはない。
魔術回路は２７本正常稼働しており、魔力量も十分にある。
若干体が縮んだことにより、筋力などが落ちてはいるが、反面、手足が短くなったことで、小回りが利くなどの利点も生じることから、気にする必要はないだろう。

そして、完全に受肉していた。

……だから……なんでさ。

とりあえずこれについては保留した。

自身の状態の確認を終え、一息つく。

それにしても、存在を消したいほど憎んでいるかつての自分の姿になるとは、なんと因果なことか。

そう独白しつつ、とりあえずこの場を離れようとしたところで――

バチンッ

そんな音とともに、周りの機械が一斉に停止した。
それと同時に、切り替わるモニターの映像。

そこに映っていたのは、一人の『人間』だった。

その容姿は、奇妙なことに、男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える。

自然、警戒を強める。

そしてそれは声を発した。

「ようこそ、『来訪者』。私の名は、アレイスター・クロウリー。この、学園都市の統括理事長だ。」

その名にひどく驚いたが、それを表情には出さず、私も答える。

「挨拶してくれるのはありがたいのだが、何分私は、状況が把握できてない。
できれば、説明をしてもらうとありがたいのだが。」

「わかっている。だが、そのまえに1つ質問がある。
君は、いったい『何』だ？」
その質問が、名前などを聞いているのではないことを理解する。だが、こちらも簡単に素性を明かすわけにはいかない。
「ただの一般的な人間だが？」
それを聞き、彼――（おそらく男だろう）、アレイスターも言葉を返す。
「それだけの魔力を内包しておいて、よく言う。」
その言葉に、私は内心驚いたが、それを表情に出さずに、話を続ける。
「魔力…、わかるのか？」
「以外かね？」
「いや、このように機械が多くあるとな…」
「なるほど。たしかに、科学と魔術を結びつけるのは難しい。私が魔術を知らないと思ってもおかしくないだろう。」
「では、おまえが私を呼び出した魔術師なのか？」
「私は魔術師などではない。少なくとも、今はな。そして、君を呼び出してなどはいないが、ここにいる原因はおそらく私達にあるの

だろう。
…とりあえず、私が話すのはこれくらいだ。では、先ほどの質問に答えてくれるとうれしいのだが。」
先ほどの質問、私が『何』なのか。
とりあえず今は、話す以外の選択肢はないのだろう。

「私は、英霊だ」

「英霊、とは？」

「英霊とは、簡潔に言えば、生前英雄だった者のことだ。
英雄のなした功績は、神話や伝説となり、それは信仰を生む。
その信仰をもって人間霊である彼らを精霊の領域にまで押し上げたのが、英霊だ。」

「…なるほど。こちらの定義とは多少異なっているな。話を続けてくれ。」

「……ああ。そして、英雄は死後、英霊となり、完全に現世と切り離された、『英霊の座』へと運ばれる。」

「英霊の座？」

「そう、英霊となったものが至る場所だ。」

「なるほど。」

そこで、しばし両者は共に無言となった。

私は、これ以上の情報を、現時点で明かす必要がないと考えて。
アレイスターも、なにかを思考しているようだ。

やがて

「なるほど…、だいたいのことは理解した。
だが、最後に1つ聞かせてもらおう。」

「なんだ？」

「『英霊』だというのならば、君も歴史に名を残す『英雄』なのだろう？
では、君の名は、なんという？」

「…あいにく、私は特殊な英霊でね…。
名なんてものは、ほとんど知られていないのだよ。
だから聞いても、それにあてはまる英雄は存在しないだろうが…。
私の名は、エミヤという。」

「…エミヤか。なるほど。これでこちらからの質問はおわりだ。」

そういってアレイスターは黙った。

「ならば、次は私の番だ。なぜ、私はここにいる？」

「それは、我々の行った実験の結果だ。」

「実験？」

「ＡＩＭ拡散力場を重ね合わせることにより、別の『界』をつくる実験だ。」

ここで、聞きなれない言葉が出てくる。

「ＡＩＭ拡散力場とは？」

「能力者が無自覚には発している微弱な力場のことだ。能力者については、あとで説明しよう。

とにかく、その力場を使って、私は新たな『界』を作ろうとした。結果として、確かに、『界』のようなものはできたが、それは不安定であり、また、稀薄すぎるものであり

私は、実験は失敗と判断し、その『界』の維持を解いた。

だが、想像に反して、『界』は消滅せず、さらに、どこか別の『界』へとつながった。

そして、そこから現れたのが、君だ」

「…なぜ、そこから私が？」

「おそらく、その英霊の座、と呼ばれる処へとつながったんだろう。ちなみに君が出てきた後、『界』は完全に消滅した。」

「…なるほど。」

ずいぶん突拍子のない話だ。

しかし、ほかに信じるあてもない。

「なら次だ。ここ――学園都市といったか――についてと、さきほどの能力者について聞かせてもらおうか。」

「ああ、学園都市とは――――」

そして、アレイスターの話は、私の予想の範疇を大きく超えた話であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7235z/

とある錬鉄の英霊が為す物語

2011年12月24日01時45分発行